

令和4年度

国語

(解答はすべて解答欄に記入すること)

この試験問題は持ち帰ることができます。
なお、本問題で利用した著作物は、著作権法第36条により、
試験の目的上必要と認められる限度において複製したものです。
同目的以外の利用はできません。

(長野県教育委員会)

受験 番号					氏 名	
----------	--	--	--	--	--------	--

〔問一〕 次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。なお、段落のはじめの①～④は形式段落の番号を示すために、出題の便宜上つけ加えた。

Blank area for the reading passage and questions.

Blank area for the answer.

〔片田敏孝「人に寄り添う防災」〕

(一) 線部 a s e について、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

また、カタカナを漢字に直し、楷書で書きなさい。

a 率先 b カンキ c エンカツ
d ジョウセイ e ジュウソウ

(二) 文章中の◆と●と■の箇所には、それぞれ同じ言葉が入る。適切な言葉を次のア～キから選び、それぞれ一つずつ記号で答えなさい。

ア 消極 イ 効果 ウ 客観 エ 直接
オ 革新 カ 整合 キ 主体

(三) 線部①「ナッジ理論」とあるが、災害時においてどのような人の行動特性を利用することができるかと筆者は述べているか。本文中で具体的に示されている言葉を五字で書き抜きなさい。

(四) 線部②「自分の避難行動が持つ外部性」について、筆者は自身の防災教育の取り組みでどのように伝えているか。ここより後の段落から、当てはまる内容の一文をさがし、最初の七字を書きなさい。

(五) 次の文法の問いに答えなさい。

(i) — 線部③「ない」の品詞・活用形をそれぞれ書きなさい。

また、— 線部③と同じ品詞のものを、次のア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。

「ア 頼りない」 イ わからない ウ 地図もない」

(ii) 空欄 A に当てはまる接続語を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

「ア すると イ しかし ウ つまり エ また オ すなわち」

(六) 防災コミュニケーションを考える二つのアプローチについて、筆者はどのように述べているか。次の文の B と C に当てはまる最も適切な言葉を、本文中からそれぞれ四字で書き抜きなさい。

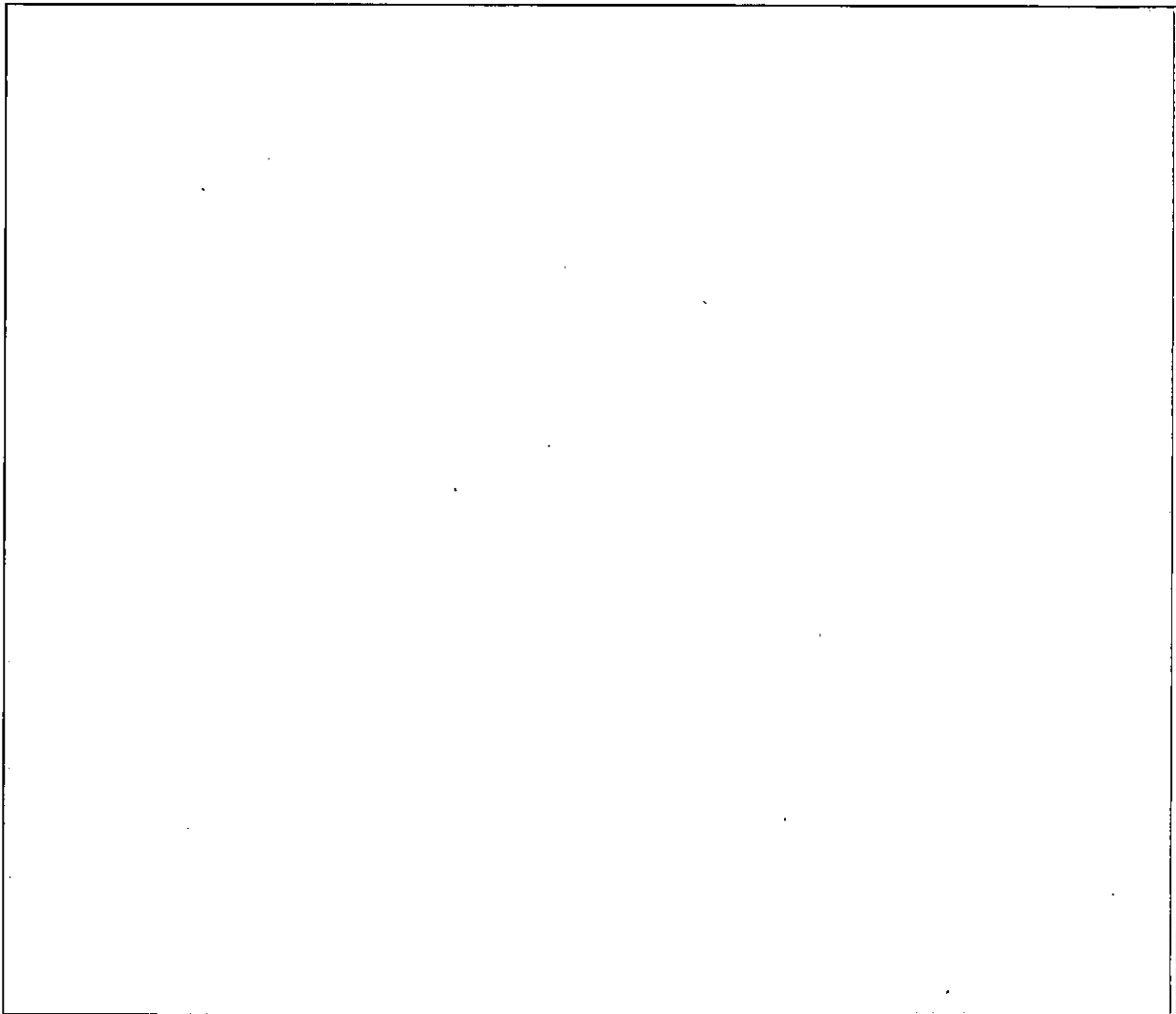
災害発生時において、正常性バイアスに優先する愛他性を強調し、それによって、避難行動を促進する B を導くため、平時において C に働きかける取り組みが必要である。

(七) 次の文は、どの段落の終わりにつなげるのが最も適切か。段落番号を一つ書きなさい。

(八) 次の中から、本文の内容に当てはまらないものをすべて選び、ア～オの記号で答えなさい。

ア 広島県が出したメッセージには、地域コミュニケーションを強め、自分のためだけでなく他者のために思いやり、「地域から犠牲者を出さない」という強い願いが込められていた。
イ 平時の地域防災活動は、正常性バイアスに優先する愛他性を強調し、愛他性に基づく行動を誘発することの結果として、正常性バイアスを回避することが目指すべきプロセスであると筆者は考えている。
ウ いざというとき、逃げる決断ができないのは、避難しないと決めているのではなく、意思決定ができていないという相手の視座に立ち、そのうえで避難する動機づけを考えて提示することが大切だ。
エ 筆者は、常にナッジの定義との関係を精緻に図りながら、地域においての防災教育を地道に続けている。釜石市の子どもたちの事例は、母親の子どもたちへの愛他性を利用したナッジであるといえる。
オ 適正な情報操作をすることが、災害発生時に多くの人々の行動を抑制し、滞りない避難行動が達成できることにつながることで、つまり正常性バイアスを突破することにつながることを認識を更に深めたい。

〔問二〕 次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めた部分、訓点を省いた部分がある。



〔「淮南子」新釈漢文大系〕

(一) — 線部①「桓公」、— 線部②「輪人」と同じ人物を指し示している言葉を、それぞれ本文中からすべて書き抜きなさい。

(二) 本文中の に当てはまる適切な言葉を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- 〔ア 応 イ 猶 ウ 須 エ 宜 オ 焉〕

(三) — 線部③「説」の意味を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- 〔ア 先哲の考え イ 有益な史実 ウ 座右の銘〕
- 〔エ 謝罪の言葉 オ 申し開き〕

(四) — 線部④「臣不能以教臣之子」は、「臣以て臣の子に教ふる」と能はず」と読む。この読みに従って、解答欄の白文に返り点と送り仮名を付けなさい。送り仮名はカタカナで書くこと。

(五) — 線部⑤「之」が指している内容を、本文中から十四字で書き抜きなさい。(読点を含む)

(六) — 線部⑥「獨」は「ひとり」と読むが、ここでの意味を現代の言葉に置き換えて、ひらがな二字で書きなさい。

(七) 本文の内容に当てはまるものを、次のア～オからすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 苦勞も喜びも共に味わいながら、仕事の技能を高めていくことの尊さを輪人は語った。
- イ 輪人は桓公の読んでいる、亡くなった聖人の本を指して、その書物は聖人のかずに過ぎないと言った。
- ウ 輪人はあえて桓公を怒らせる言い方をして、民が望んでいるのは仁政であることを訴えた。
- エ 聖人の真意を伝えるものは文字や言葉ではないことを、輪人は自分の仕事にたとえて語った。
- オ 桓公は、いくら優れた技能を身に付けても、生きて働くことよってのみその尊さは味わえるものと悟った。

(八) この文章は、最後に老子の言葉が引用されている。本文中の(老子の言葉)に当てはまるものは次のうちどれか。ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 故に老子曰く、道の道ふ可きは、常の道に非ず、名の名づく可きは、常の名に非ず、と。
- イ 故に老子曰く、功成り名遂げて身退くは、天の道なり、と。
- ウ 故に老子曰く、夫れ大匠に代りて斲る者は、其の手を傷げざること希なり、と。
- エ 故に老子曰く、聖を絶ち智を棄つれば、民の利百倍す、と。
- オ 故に老子曰く、事に道に従ふ者は、道に同じ、と。

〔問三〕 次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めた部分がある。

〔俊頼髓脳「日本古典文学全集」〕

(一) ——— 線部①「たれにおほせて」の意味を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人目をはばかり、だれにも分らないようにして
- イ だれの気分を損ねないようにして
- ウ いったいだれにその思いを伝えようとして
- エ その責めをだれかに負わせるつもりで

(二) 線部②「にしき」と、線部③「たたぬ」は縁語である。そのことをふまえて、線部④「たたぬ」を漢字に直して楷書で書きなさい。送り仮名も正しく書くこと。

(三) 線部④「これら」の指すものを、本文中から二十五字以上、三十字以内で書き抜きなさい。

(四) 本文中の■にはすべて同じ言葉が入る。それは次のア～オのうちのどれか、一つ選び、記号で答えなさい。また、その言葉の文法的な意味として正しいものを、a～eから一つ選び、記号で答えなさい。

- 「ア やは イこそ ウか エながら オさへ」
- 意味〔a 限定 b 順接 c 強意 d 反語 e 継続〕

(五) 線部⑤「とものみやつこは、あさぎよめにはすらむ」と筆者が懐疑的に言っているのは、どのような事実に基づいているのか。「皇居には」という書き出しで、本文の内容をもとに書きなさい。

(六) 線部⑥「もみぢとも心えむに、ひが事にあらじ」を「落花」という言葉を補って、三十字以上、四十字以内で口語訳しなさい。

(七) 「不自然なことではなからうよ」という意味になる言葉を、本文中から七字で書き抜きなさい。

(八) 線部⑦「おづおづ」は「慎重に」という意味であるが、和歌の技法に熟達していない人に対して、慎重に詠むことを筆者が勧めているのはなぜか。筆者の歌評の内容をもとに、その理由を「主題」という言葉を使って四十字以上、五十字以内で説明しなさい。

〔問四〕「中学校学習指導要領」（平成二十九年三月）第2章各教科 第1節国語に

即して次の問いに答えなさい。

(一) 次の文章は第2学年の「思考力、判断力、表現力等」の「読むこと」に示された指導事項の一部である。空欄AからGに入る適切な語句を、①～⑬の語群から選んで記号で答えなさい。

第2学年

イ A に応じて複数の情報を B ながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈すること。

ウ 文章と図表などを C、その関係を踏まえて内容を D こと。

エ E を明確にして文章を F などし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について G こと。

- ① 場面 ② 観点 ③ 意図 ④ 目的 ⑤ 立場 ⑥ 結び付け
- ⑦ 関連付け ⑧ 関係付け ⑨ 収集し ⑩ 整理し ⑪ 検討し
- ⑫ 考える ⑬ 評価する ⑭ 解釈する ⑮ 比較する

(二) 次の文章は第1学年から第3学年までの「思考力、判断力、表現力等」の「読むこと」に示された言語活動例の一部である。空欄HからJに入る適切な語句を書きなさい。

第1学年 説明や記録などの文章を読み、理解したことや考えたことを H し

たり文章にまとめたりする活動。

第2学年 報告や解説などの文章を読み、理解したことや考えたことを I し

たり文章にまとめたりする活動。

第3学年 論説や報道などの文章を比較するなどして読み、理解したことや考えたことについて J したり文章にまとめたりする活動。